

本誌以外の雑誌に登載の論文 (1959)

- 1) **Koshimura, S., Murasawa, K., Hirata, R. and Bando, Y. :** Further Experiments on the Carcinostatic Action of Bis (2-hydroxy-3,5-dibromophenylazo)-n-propylphloroglucinol (英文)

2,2'-Dihydroxyazobenzene 系誘導体を指向する制癌に関する実験的研究において, Bis 型 azo-alkyl-phloroglucinol 誘導体には 顕著な抗エールリッヒ腹水癌性を示す 性質があることは既に実証された処である. 本論文では Bis (2-hydroxy-3,5-dibromophenylazo)-n-propylphloroglucinol [Azo-106] についてその抗腫瘍性に関する吟味検討を行つて次の成績が得られた.

 - 1) 吉田肉腫移植ラットに対し Azo-106 の腹腔内投与は腹水内腫瘍細胞における高度の破壊と腫瘍増殖の抑制, ひいては動物の延命を招来せしめる.
 - 2) エールリッヒ固型癌は本物質の腹腔内投与で抑圧的影響を蒙る.
 - 3) サルコーマ180の腹腔内移植マウスに対してもまた本物質は 顕著な制癌効果を示した.

ACTA, 15, 154, 1959.
- 2) **宮地民子 :** 制癌に関する実験的研究

第9報 異処的投与方法による Bis (2-hydroxy-3,5-dibromophenylazo-n-propylphloroglucinol [Azo-106] の抗腫瘍性の検討, 十全医学会雑誌, 63, 278, 1959.
- 3) **Shoin, S. :** Experimental Anticancer Studies. Part 10 On the Effect of Avirulent-mutant Strain of *Streptococcus hemolyticus* upon Invasion Power of Ehrlich Ascites Carcinoma in Mice (英文)

弱毒溶連菌生菌体を エールリッヒ癌細胞と試験管内で短時間接触せしめると, 癌細胞は強毒溶連菌を使用した場合におけると同様 マウスに対する移植侵襲性を喪失することを実証した.

Japan. J. Exp. Med., 29, 529, 1959.
- 4) **宮地民子, 桐田俊雄, 大月博昭, 角野光司 :** 制癌に関する実験的研究 第11報

溶連菌の抗エールリッヒ癌性に及ぼす温熱的処理の影響についての考査, 十全医学会雑誌, 63, 286, 1959.
- 5) **宮地民子 :** 核酸による溶血性連鎖状球菌の溶血毒増産現象に関する研究 第18報

溶連菌の Streptolysin S 産出能に対する温熱, 紫外線並びに菌体破碎の影響について, 十全医学会雑誌, 63, 291, 1959.